

聖書：ルカ 24：36～43

説教題：主の復活のリアリティー

日時：2013年4月14日

イエス様が復活した日の夜、弟子たちが集まっていたエルサレムの部屋は大変なことになっていました。彼らはこの日の朝、女たちから、主の墓が空っぽであること、御使いが現われて、「主はよみがえられた」と告げたことを聞きました。最初は彼らはそれを信じませんでした、彼らの考えを変えたのは、12弟子の筆頭者ペテロがイエス様にお会いした！という情報でした。さらにそこへエマオから引き返してきた二人の弟子の報告が加わります。彼らは道であった色々なことや、パンを裂かれた時にイエスだと分かった次第を話しました（35節）。

その時に、と今日の箇所は始まります。彼らがそのことを話している最中に、突然イエス様が彼らの真中に立たれたのです。ヨハネの福音書を見ますと、弟子たちはこの時、ユダヤ人を恐れて部屋の戸を閉め、カギをかけていました。イエス様はどのようにして、ここに現れることができたのか。これはイエス様の復活後の栄光のからだについて示唆を与えるものです。前回見たエマオ途上の記事でもそうでした。イエス様だ、と分かった瞬間、イエス様の姿は見えなくなりました。あるいはこの日の朝、墓から復活した時も、入口の岩がまだ転がされていない時点で、イエス様はすでに墓の外に出ておられました。イエス様の復活後の栄光の体は、今の私たちの体が持つ様々な制限を乗り越えるものであった、ということが分かります。

さて、そのイエス様がもし無表情で何もお話しにならなかつたら、それはそれは怖い出来事だったでしょう。しかしイエス様は言葉を語ってくださいました。新改訳では36節の終わりに印がついていて、欄外を見ると、異本「そして彼らに言われた。『あなたがたに平安があるように。』」を加える、とあります。新改訳聖書は、この部分はもともとの本文にはなかったものと判断して欄外に載せていますが、一般にはこれはもともとルカが書いた原本に含まれていただろうと考えられています。40節もそうです。新改訳に40節はなく、欄外に参考として記してあるだけですが、それもルカが書いたオリジナルに最初から含まれていただろう、と考えられています。

そうだとすると、イエス様は弟子たちの真ん中に立たれて、まず「あなたがたに平安があるように」と言ってくださったことになります。これは考えれば考えるほど、非常に恵み深い言葉ではないでしょうか。弟子たちはイエス様を見捨てた人々です。イエス様にどこまでもついて行きます！と誓約しながら、イエス様が逮捕されると、われ先に！と逃げた人々です。そんな彼らに対してイエス様がまず「良くも裏切ってくれましたね」と言ってもおかしくありません。あるいは「わたしが十字架にかかっていた時、あなたがたはどこにいたのですか？」と問うても良い。あるいはこんな彼らには見切りをつけて、新しい12弟子を選んで新しい活動を始めても良かった。ところがイエス様はこんな彼らをご自分から訪ねてくださって、「あなたがたに平安があるように。」と言ってくださったのです。

ご存知のようにこれはヘブル語のシャロームという挨拶に対応します。ユダヤ人は会うたびに、あなたに神の平安がありますように、という祈りを込めた挨拶をしました。この「平安」

という言葉は、聖書の言語では「平和」と同じ言葉で、何よりもまず「神との平和」を意味しています。私たちの一番の問題は、この神との平和を失っていることです。罪を犯して神との間に平和がないので、心の平安もなければ、本当の意味での祝福にもあずかることができない。しかしイエス様は私たちの代わりに十字架について、罪をすべて清算してくださった方として、神との平和という最も大切な祝福を私たちにもたらすことができるのです。そしてその祝福の宣言をここでしてください。

しかし、弟子たちはこのことをすぐに受け入れることができません。彼らは今の今まで、「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言い合っていました。しかし、いざ現実に主を前にした時、彼らは慌てて、幽霊だ！と怯えた。イエス様はそんな彼らに 38 節と 39 節でご自身の手や足を差し出し、「さわって、よく見なさい」と言われます。その手や足には十字架の釘の跡が残っていたでしょう。イエス様は私たちをどれほど愛し、そのいのちまでささげてくださいましたか、そのしるしを見せてもう一度ご自身の愛をあかししてくださるのです。そして彼らはイエス様に触ることによって、単なる霊ではなく、肉や骨があることを確かめることができました。ルカはこうして、イエス様が肉体を持ってよみがえられたことをはっきり記しています。時々、体は死んでも魂は永遠に生きるといういわゆる靈魂不滅の教えをキリスト教の特徴的なメッセージと思っている人がいますが、そうではありません。それは魂は人間存在の素晴らしい部分だが、肉体はより低い部分であるとみなす異教の二元論と関係しています。キリスト教の特徴はむしろ、からだの復活を主張しているところにこそあります。神は人間をからだと魂の両方を持つ存在として造ってくださいました。その両方があって初めて人間であり、神はその両方を持つ存在として私たちを回復し、救ってくださいるのです。そう聞くと、では復活する時のからだは何歳ぐらいの肉体なのだろうか、とある人は心配になるかもしれません。永遠の生活だから、できるだけ若い時の、美しい時の、また健康な時の、と願うかもしれません。残念ながら聖書にその答えはないようです。ただ I コリント 15 章に、それは栄光の体であり、強い体であり、御霊の体であるとあります。ですからとにかく喜ばしいものであることだけは確かでしょう。一番良いものを下さる神様に期待して、私たちはやがての日を楽しみにしたいと思います。

さて、弟子たちはまだ信じることはできませんでした。41 節に「それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっていた」とあります。目の前で起こっていることがあまりにも素晴らし過ぎるので、すぐには受け入れることができないでいた。ほつたをつねって痛いと分かっても、本当にこれをこのまま信じて良いのかどうか……。復活とはそのような信じられないような喜びの世界を私たちに提供してくれるものです。

そこでイエス様は彼らに、「ここに何か食べ物がありますか。」と尋ねられます。すると彼らは焼いた魚を一切れ差し上げた、とあります。これはガリラヤ湖で彼らが漁をして取った魚ではありません。彼らは今、主都エルサレムにいます。ですからこの魚は彼らがこの大都会で買ったものだったかもしれません。またこの時は、エマオで夕食を取ろうとした弟子たちが引き返して来た後の時間でしたから、もう夜もだいぶ時間を過ぎていただろう、と考えられます。ですからこの魚は、ここにいた弟子たちが食事をして、そこに食べ残していたものだったかも

しれません。その一匹を差し上げる。イエス様はそれをみんなの前で食べて見せる。みんなが息を飲んで見つめる中、イエス様だけ、ムシャムシャとそれを食べ始められます。何という印象的な場面でしょうか。イエス様はお腹がすいて、食べているわけではありません。復活を確信できない弟子たちのために、食べて下さった。イエス様は彼らを愛して、一生懸命魚を食べて見せる。弟子たちは一生懸命、その様子を見つめる。そしてイエス様が全部食べ終わって、ホラ、私は食べましたよ！という顔でニッコリされると、弟子たちの心には、本当に主はよみがえられたのだ！という確信が大きく広がったのです。信じていいのだろうかと思っていた喜びが、自分たちの心の中に大きく、現実のものとして広がって行く。これは何という素敵で、喜びにあふれる感動的な場面であったのでしょうか。

このイエス様の行動は、どんなメッセージを持っているでしょう。それは一言で言って「イエス様の復活のリアリティー」ということです。これとの関連で思い出すのは、8章に出てきた会堂管理者ヤイロの娘の生き返りの記事です。「子どもよ、起きなさい」と言って、少女を死から命へと呼び覚まされたイエス様は、娘に食事をさせるようにと言われます。死を打ち破る一大イベントが行われた直後に、食事を取らせなさい、と主が言われたとは、何となくチグハグな感じがします。しかしここに、イエス様が復活をどのようなものとして見ておられたかが示されています。すなわち、命に呼び覚まされる出来事と、食事を取るという出来事は、別々の現実ではないということです。私たちは、食べ物を口にするというのは、この世の生活の低い次元の話であり、体の復活はもっと高尚なことと考えがちです。そしてこの両者の間にはつながりよりも、断絶があると考えがちです。しかし神にとっては、からだのよみがえりも、食事を取ることも、一つの同じ現実であるということです。異なる二つの現実がそこにあるのではなく、私たちが普段食事を取るのと全く同じレベルの現実において、からだのよみがえりという出来事が生起している。

今日の箇所もそうでしょう。主が魚を食べて見せたこの記事に示されていることは、主は私たちの日常生活の中によみがえって下さった、ということです。弟子たちはこの後、魚を食べる時、何度となく思ったに違いありません。復活の主もこのように魚を食べられたのだ、と。彼らはそれまで、食事の時にそんなことは考えたことがなかったに違いありません。おいしいから食べる。健康を保つために食べる。お腹がすくので食べる。それは生きるために、何も考えないで、していることです。しかし彼らはこれ以後、食事をするたびに、イエス様の復活をリアルに信じることができたに違いない。自分たちが今、食事を取っているというこの現実と同じレベルで、イエス様はよみがえられた。イエス様の復活と、私たちのこの生とは別々のことではない、と。

そしてこのことはさらに次のように言うことができます。私たちの今ここでの生活は、キリストの復活の出来事という新しい光の下で考えられ、捉え直されるべきであるということです。私たちが今、生きているこの現実において、主の復活のみわざは起こったのです。そして主は私たちの真中に立って、「平安があるように」という力ある言葉を語ってくださった。ですから私たちの生きているこの生は、主の復活によって、その色を大きく塗り替えられているのです。私たちがこの主の復活の出来事によって開かれた恵みの世界に引き上げられる生活へ進む

ことができるのです。

確かに私たちの地上の生活には、なお多くの困難と試練が付きまとうでしょう。悩み、恐れ、戦い、涙がまだ続くでしょう。主の復活など、今の私に何の意味があるのだろうかと思うような事態に置かれることもあるでしょう。しかしその時、私たちは思い起こさなければなりません。私が今置かれている現実と、主がよみがえって現われた現実とは別々ではない。キリストは復活の恵みをもって、私が生きているこの現実に入って来て下さった。今、私にそのすべてが見えているわけではないけれども、キリストにより頼む私は、そのキリストの復活の力と恵みにあずかって生きることができる。この世の悲惨が行き着く死さえも、私にとっては終わりではない。キリストはその死さえも復活によってひっくり返し、栄光に至る道を信じる者たちに備えてくださったのだから、と。私たちは毎日の生活で魚を食べながら、食事をしながら、この主の復活の恵みを信じ、希望を持って歩むことができます。「平安があなたがたにあるように」と語っておられる復活の主が、目の前の多くの現実を超えて、私をかの完全な贖いの日、栄光の日に導いてくださることを喜び見据えながら、主を賛美しつつ、その恵みの道を歩むことができます。